The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	儒教システムと文学における女性像
Author(s)	井波, 律子
Citation	中国研究集刊. 1994, 15, p. 26-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61238
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

儒教システムと文学における女性像

井波律子

プロフィール

井波律子　金沢大学教養学部（中国語学・中国文学）教授。一九四四(昭和十九)年富山県高岡生まれ。京都大学文学部卒業。六朝文学を専攻。中国最初の体系的な文学理論『文心雕龍』をテーマとする卒業論文は、故吉川幸次郎教授によって絶賛された。著書の『中国人の機智』、『中国的レトリックの伝統』、『世説新語』、『読み切り三国志』、『中国のグロテスク・リアリズム』、『中国のアウトサイダー』、『酒池肉林』は、新鮮な着眼によって中国文学研究の新世面を切り開くものと評価されている。

最初に申しあげておきたいのは、私自身、中国文学を研究対象とするにあたり、通常は男女の性差に固執する立場をとらないということである。なぜなら、たとえば『三国志』にせよ『三国演義』にせよ、そうしたものをも「女性の立場」から見るということは、まったくナンセンスだからである。だからといって、疑似的に「男性の立場」に立つということでもなく、あえていえば、両性具有的（無性的あるいは中性的ということではない）なニンゲンとして、対象と向かい合いたいと、私は思う。付言すれば、対象に対して両性具有的であること、これは、男性研究者の場合も当然あらまほしき態度であることは、いうまでもなかろう。

ただ、視点を儒教システムあるいは儒教と文学の関わりということに置いた場合、どうしても男女の性差がどう扱われてきたかということが、大きな問題としてクローズ・アップされてくる。これは、二十一世紀を目前にひかえてなお、根っこのところで、呆れるほど古びた男女差別の意識や感覚が、依然として死滅しない現在の状況とも、密接に関わる問題だと思われる。

儒教というと、私が反射的に思いうかべるのは、それが「差異化」のイデオロギーだということである。中国の伝統社会における儒教システムは、家庭レベルにおける長幼の序、社会レベルの身分の上下、そして国家レベルの君臣関係というふうに、年齢の上下、身分の上下を軸として、孝悌や忠信という本来エモーショナルな要素を教条として掲げ、人と人との関係性を家庭レベルから国家レベルに至るまで、隙間なくびっしりと差異化する。

しかも徹頭徹尾、このシステムは男性論理にもとづくものであり、最初から女性は枠の外に排除され、「女子と小人は養いがたし」と劣性のマークが刻印される。儒教システムの差異化の装置は、こうしてまず、最大の劣性を帯びた存在として、女性を差異化し、世界の外へ排除したところから組み立てられたといえよう。

だから文学の世界でも、こうして排除された存在たる女性の姿を、正面からとらえ描きだした作品は、伝統的な儒教システムじたいが綻びはじめた近世、それも明末の小説まで、生まれなかったといってよい。もちろん単に女性を中心人物とした作品ということならば、唐代伝奇をはじめ先行するものが、いくらもあげられる。しかし、たとえば「李娃伝」や「謝小娥伝」などにしても、これらの作品のヒロイン像は、あえて図式的な言い方をすれば、夫の出世に貢献する「いじらしくも賢明な妻」だったり、艱難辛苦の果てに父や夫の仇討をする「けなげな孝行娘」だったりと言う具合で、究極的には、男性論理に支えられた儒教システムにスッポリはまりこみ、許容されるイメージなのである。

こうした男性中心志向を打ち破る女性像が、群れをなして作品世界に踊り出てくる最初の作品としてあげられるのは、十六世紀末に書かれた白話長篇小説『金瓶梅』である。ここに登場する女性たちは、夫を殺し

て西門慶と結びついたとてつもない悪女の潘金蓮、潘金蓮よりは毒気が薄いけれども、それでもやはり夫を死に至るまで追いつめて、西門慶と結びついた李瓶児をはじめ、不倫姦通なんでもこいとばかりに、自らの欲望につき動かされた多くの「反倫理的な悪女」の姿が、毒々しくもいきいきと描かれている。ここに、従来、世界の外に排除された女性という存在が、極端化された「欲望の論理」により、差異化を維持し続けようとする儒教システムを、侵犯する姿が象徴的に見られることは確かである。

ただ問題は、『金瓶梅』に描かれるこうした女性たちがすべて、「金と力と女」にしか興味のない、およそ無自覚的な「欲望の渦」としか言いようのない、中心人物の成り上がり商人西門慶と結び付き、その欲望の渦のなかで快楽の輪舞(ロンド)を踊り、やがてもろともに滅んでゆくばかりということである。『金瓶梅』という小説は、だから、明末、伝統的な儒教システムが抑圧しきれなくなった欲望の論理の爆発のさまを、みごとに描いているとはいえ、中心人物の西門慶にも彼を取り巻く悪女たちにも、根本的にまったく理念や意識といったものがない。『金瓶梅』の登場人物は、まさしく男も女も理念なき欲望のドラマ、乱痴気騒ぎを演じているのである。

これに対して、『金瓶梅』から約二百年後、清代、十八世紀中頃に書かれた、中国古典小説の最高傑作である『紅楼夢』になると、ここに具象化された儒教システムに対する異議申し立ては、はるかに根源的であり、構造化された形をとる。儒教システムの基礎をなす単位は家庭であり、そこでもっとも重視されるのは「孝」である。この儒教の根本理念を逆手にとって、『紅楼夢』では、舞台となる「大貴族」賈家の当主の母である「賈母」を、最高権力者の地位に据える。「孝」という基本原則によって、息子たる賈家の当主たちも、彼女に絶対服従せざるをえない。かくして、『紅楼夢』は、男性論理を母性原理によって覆すこのグランドマザー賈母を頂点とする、絢爛たる女たちの世界を繰り広げるに至る。

こうした物語的構造は、儒教システムに内在する理念そのものを、伝統的価値観を逆転させ空洞化させる武器として転用することによって、組み立てられたも

のである。さらに注目すべきなのは、こうして伝統的価値観を文学的に根こそぎ逆転させた、『紅楼夢』の女たちの世界で、ただ一人、彼女たちと真の意味で共生する中心人物の賈宝玉が、男でありながら、社会的に有為の存在であることを至上視する儒教の伝統的価値観、男性論理を嫌悪し否定する存在として設定されていることである。伝統の呪縛から解放され、「女の子は水でできた身体、男は泥でできた身体、ぼくは女の子を見るとすっきりするけれど、男を見ると臭くてむかつく」と公言して憚らない賈宝玉との関わりを通じて、林黛玉や薛宝釵をはじめとする『紅楼夢』の少女たちは、ますます輝きを増すというわけである。

このように『紅楼夢』では、グランドマザーを頂点として母性原理ひいては女性原理による、伝統的価値観（男性論理）の逆転がなされると同時に、賈宝玉に象徴されるように男性自らが、伝統的価値観（男性論理）を否定するという、二重の逆転の構図が見てとれる。これにより、一種ユートピア的様相を呈する『紅楼夢』の物語世界が、『金瓶梅』描くところの無原則的欲望の乱痴気騒ぎと比べれば、はるかに明確な理念にもとづいて形づくられていることは明らかである。それは、意識的にも感覚的にも、女が解放され自由にならないかぎり、男も解放され自由になれない。逆に、男が解放され自由にならないかぎり、女も解放され自由になれない、と、語り続けているのである。十八世紀中頃に書かれた『紅楼夢』の提起するこのテーゼは、男女の性差について考えるとき、現代においてもなお追求され続けるべき根本的なものだといえよう。

というわけで、儒教について考えようとすると、それも男女の性差の問題に的を絞ると、その伝統的価値観が、信じられないくらいあまりにもイビツであるため、いかにその伝統の呪縛を断ち切り、逆転させてきたか、あるいは逆転させてゆくか、ということにしか、私自身の関心はないと言わざるをえない。ただ、『紅楼夢』について述べたとおり、儒教の根本原則である「孝」の理念じたいが両刃の剣であり、儒教体制逆転のキーポイントとなるという具合に、儒教それじたいが自己否定の契機を内在させているということは、実におもしろいと思う。

これに関連して、先に儒教は「差異化」のイデオロ

ギーだと言ったけれども、この「差異化」についても、やはり両面性があると思われる。神と人間の関係を根本とするキリスト教と異なり、儒教は基本的に人間相互の関係性を重視するところにポイントがある。その関係性に着目するところから、差異化のイデオロギーが生じてきたといえようが、その差異化の作用が、国家や社会や家の側からの強制として個人に押し付けられ、社会的身分を固定させる権力性を帯びる場合は、それはいまや苔の生えたアナクロニズムでしかありえない。ただ、視点を逆転させ、差異化イデオロギーから権力性をすっぱり抜き去って、個人の側に重点を置けば、人と人との関わりのなかで、他人と自分の差異を確認して自らを相対化し、対他関係においてどのようなスタンスをとるかといった面では、長い伝統をもつ練り上げられた差異化の高度なテクニックは、おおいに有効性を発揮する余地があると思われる。ちなみに、根こそぎ伝統的価値観を文学的に逆転させてみせた、『紅楼夢』の世界の細部をびっしり埋めているのは、数百人にのぼる登場人物のそれぞれの位相に合わせた、日常生活における身振り、立居振舞に現わされる差異化の美学なのである。

つまるところ、それじたいに自己否定、自己変革の契機を内在させているかぎり、儒教は時代とともに変貌し続ける集合意識として、あるいは関係性の美学、文化装置として生き続けるであろうが、それが表層的な変装をほどこしただけで、かつての伝統社会においてそうだったように、人間や社会を固定化させる準拠枠、権力のイデオロギーと化すようなことがあれば、その時、もはや儒教に未来はないと、私は思う。